

近世節用集史の研究

本書は、近世節用集の展開を跡づけ、その辞書史的意義を検討するための基礎的研究である。

節用集は、その誕生期である戦国・安土桃山時代にも相当数の写本がおこなわれており、近世においては営利出版により多様な異本を簇生させつつ、広範な利用者を獲得していった。それゆえに、時代時代の広範な言語生活に寄与したであろうこと、言語資料としての活性も獲得していたであろうことが容易に想定されるところであって、実際、国語史資料として活用されてきたところである。

ただ、なまじ原本が多数現存するためか、利用が容易であり、ために心理的な距離も近いこともあってか、古辞書としての史的展開や社会的位置付けについて承知されることがないままに、利用されているように思われる。そのような状況は、国語資料として決して円満な姿ではなからう。

そのような現況を見るにつけても、節用集、ことに多彩な異本が生み出された近世節用集の展開を描いてみたいと思ふにいたった。もちろん、その営みは、国語学的研究の側からみれば資料研究の一つとなるであろうし、辞書史的研究からも、近世における一大勢力の史的記述として一定の位置を与えられるものと思われる。

さて、近世の節用集史を描くと一口に言っても、節用集に対するアプローチに種々のものがあり得、節用集へのスタンスも多様に存しうる。また、検討をおえて一定の成果が得られれば、それを公開することになるが、そこでも、どのように示すかでいくつもの手法があることになる。たとえば、前著（佐藤二〇一七）では、近世の節用集のほと

んどが営利出版によって世に問われたことに注目して、近世出版史との関係が深い事象や、出版史に軸足を置いた検討を行なったのであった。

したがって、逆に、ここでは、出版史の側面とかわりの薄い事象を主にしたり、出版事情の現実とは一旦切り離して節用集を見つめるといったスタンスで、節用集史を描こうと思う。もちろん、出版事情との結び付きをまったく断ち切って論じることは不可能であり、最低限の関係については触れなければならず、事象によってはあえて出版史の諸状況を積極的に取り込んで検討する必要もでてくる。が、それでも、「辞書の歴史」としてイメージしやすい側面での検討を中心に史的展開を記述しようとするのである。

本書での記述のありようと方針の概要を記しておこう。

近世節用集史を記述するにあたって、まず、諸本の総体を捉える方法論と俯瞰法を示し、ついで節用集史を大きく変えたと考えられる事象に注目して時代区分を導きだし、さらに区分内の微妙な流れや大要では捨象されがちな細部について言及していくこととした。大局的・巨視的に捉えることを基礎・土台とし、これに、局部的・微視的に把握したことも載せていき、豊かな記述を目指すということになる。

近世節用集史の流れそれ自体のイメージとしていえば、一見、動いてすらいえないように見える大きな海流のようなものと捉えられよう。もちろん、その表面では大きなうねりとして大気と接するわけであり、その段階をわれわれは見たり体験したりすることができ。その細部では、小波が立っていたり、波が砕けて流れが乱れていたり、あるいは泡でおおわれて淀むこともあるだろう。そのような、大小各部分における事象をできるだけ把握していき、事象間の関係のありようを有機的に記述し、最終的には組織だった流れを説明し尽くすことを目的としたい。

全体の構成は次のようになった。なお、各部での具体的な概要は、それぞれの最初に「導言」で触れた。

第一部・序論 論の前提となるスタンス・資料の扱いなど、基本的な態度・見つけ方などに触れていく。

第二部・総論 史的展開の大筋を捉えて提示する。本書の根幹となる部分である。

第三部・各論 枝葉に当たる部分や、裏側からの検討を行なうことで、実態に迫った記述とする。

第四部・展望 前三部の記述と研究の現況に照らしつつ、今後進むべき方向について見通しを述べる。

ところで、本書であつかう「節用集」の定義ないし範囲であるが、規定するのは簡単なようで困難である。たとえば、外形としてのイロハ・意義分類という特徴だけで規定するのでは、書籍の性格として隣接する他書と区分することがむずかしい。したがって、内容面での規定も必要になるが、これも単純ではない。一七世紀の諸本の多くは易林本の収載語を中心とするが、一七世紀末期ごろより動きがあり、古本節用集印度本の一本から増補したり（上田・橋本一九一六）、多識編・字彙・以呂波韻など他書との交渉も広くあり（米谷隆史一九九二・一九九四・一九九七）、世話字集のようなものとの関係も検討されている（古屋彰一九七八）。また、日本語の字音語としての漢語ではなく、正格な詩文で用いそうな用字を積極的に示す『大成正字通』（天明二年（一七八二）年刊）なども現れた。こうした変容とともに、改編・増補のありようにも目配りした定義が必要になってきそうである。

結局のところ、少なくとも付録部分を除いた辞書本文については、その存在意義・本文系譜・改編増減・検索組織などの方面から規定することが、穏当な定義に近づくのではないかと思う。たとえば、つぎのa～dのすべてを満たすものを節用集と規定することは許されよう。そして、それは、近世節用集に親しく接する研究者の脳裏にある、いわば最大公約的な節用集像でもあろう。

a 主として、日本語で書記するための用字集・簡易国語辞典

b 主として、易林本『節用集』の所収語の系譜をひく

c 主要本文には、さまざまに増減・改編が加えられることがある

d 語頭の仮名書きのイロハ検索とともに、他の検索法をも交えて二重以上の検索組織をもつ

簡単に検証してみよう。唐話辞書は読むための辞書というべきものであるから、イロハ分類・意義分類が施されている場合でもa bに抵触することにより節用集と見るにおよばない。ただ、既存の節用集に唐話を増補したものを節用集から排除しなくてよいのはcの規定によることになる。

下学集・色葉集・語彙集型往來は、イロハ分類か意義分類かのいずれかで組織されるので、dにより節用集と見るにおよばない。また、意義分類だけを用いるものは、語義の連環・まとまりを尊重するという方針があることになる。仮にその下位分類としてイロハを採用したならば、語義のまとまりを切断することにもなるため、語彙集型往來などでは、むしろ積極的に二重検索を採ることがなかったとも考えられる。

以呂波韻は、イロハ・意義の二重検索をとるので、節用集と同様に使えることになる。が、本来の利用法は漢詩・聯句のためのものであるから、aの観点により節用集と認めなくてよいものである。もちろん、韻書であるからbにも抵触しよう。ただし、bのような本文を核とするものに以呂波韻より増補したものは節用集として認めてよいであろう。

また、『戯場節用集』『芝翫節用百戯通』などの疑似節用集も節用集には含めない。もちろん、擬する本体の盛行あればこそそのパロディ本であるから、節用集史の論述のための参考・援用資料としては十分に注目してよいものである。

表記について

書名は内題を掲げた。内題が存しないものは題簽・表紙見返し・扉・序跋などから採ることとした。

角書や割注は「」に包んで示すのを原則とした。正確さを要する場合には／によって改行を示すことがある。

引用に際して、近世・近代のもの表記は、漢字は現行のものに改め、仮名遣いは元のままとした。句読点・鍵括弧などは私に補うことがある。現代のものは、原本のまま引用した。

検討する諸本について、おおむね佐藤の蔵本によるので所蔵者名の掲出を省略した。また、現存本が多いものについても同様である。ただし、版種・誤刻など細部を検討する場合は、このかぎりではない。

近世節用集史の研究 目次

	まえがき	3
第一部 序論		15
導言		17
第一章 視点・方法		18
はじめに		18
第一節 形式と系統		18
第二節 展開概観		21
第三節 対立と棲み分け		23
第四節 特徴の内部へ		27
第五節 未確認書への対応		33
おわりに		35
第二章 節用集史の記述のために		38
はじめに		38
第一節 概略の説明		38
第二節 「開版」節用集〔分類〕目録		40
第三節 多角的な俯瞰		44
おわりに		50
第三章 書名要素「節用集・節用」の通史		53
はじめに		53
第一節 字数の変遷		54
第二節 基称の興廃		57
第三節 基称の位置		58
第四節 基称を用いない諸本		61
おわりに		63

第二部 総論——近世節用集史概観……………65

導言……………67

第一章 典型形成期……………69

はじめに……………69

第一節 寛永まで……………69

第二節 万治以降……………77

第三節 寛文・延宝期諸本のあつかい……………82

おわりに……………87

第二章 教養書化期……………90

はじめに……………90

第一節 教養書化への注視……………90

第二節 教養書化の過程と要因……………92

第三節 新規性獲得の過熟化……………96

おわりに……………104

第三章 検索法開発期……………106

はじめに……………106

第一節 近世節用集の検索法……………106

第二節 近世後期節用集の検索法……………108

第三節 新たな検索法の評価……………113

第四節 問題点の考察……………117

おわりに……………123

第四章 二極化期……………127

——イロハ・意義検索節用集の大型化……………127

はじめに……………127

第一節 イロハ・意義検索節用集の大型化……………127

第二節 大型化傾向の社会背景……………130

第三節 形式的な大型化……………135

第四節 未刊の諸本……………140

おわりに……………145

第五章 二極化期——早引節用集の大型化……………148

はじめに……………148

第一節 早引節用集の大型化の概要……………148

第二節 大型早引節用集の諸相……………150

第三節 未刊の諸本……………157

第四節 非大型本にみる大型化……………159

第三部 各論——展開の諸相と研究課題……………167

導言……………169

第一章 易林本『節用集』の諸問題……………171

はじめに……………171

第一節 易林本の性格……………171

第二節 原刻版・平井版の枠と本文……………175

第三節 平井版諸本の序列……………179

第四節 版木の損傷と平井別版・小山版……………182

第五節 小山版の刊行者……………185

第六節 刊記をめぐって……………188

おわりに……………190

第二章 横本『二体節用集』の諸問題……………194

はじめに……………194

第一節 近世節用集史上の意義……………194

第二節 諸本の関係……………196

おわりに……………163

第三章 寿閑本『節用集』の意義……………207

はじめに……………207

第一節 慶長刊行諸本の概要……………208

第二節 寿閑本の性格……………210

第三節 刊行者・寿閑……………219

第四節 慶長一六六年本節用集をめぐって……………221

第四章 『節用集』寛永六年刊本類の系統……………227

はじめに……………227

第一節 諸本概観……………228

第二節 寿閑本系の確認……………232

第三節 系統の交雑……………236

おわりに……………241

第五章 『真草二行節用集』の刊行状況……………244

はじめに	244
第一節 異版研究の必要性	244
第二節 刊行・異版のインターバル	247
第三節 諸本の検討	249
おわりに——〈江戸版〉の可能性	266
第六章 近世前期節用集の検索補助法	269
はじめに	269
第一節 慶長・寛永期	270
第二節 寛文・延宝期	276
第三節 『頭書増補二行節用集』	281
おわりに	281
第七章 早引節用集の位置づけをめぐる諸問題	287
はじめに	287
第一節 『宝曆新撰』早引節用集』の序	287
第二節 近世庶民の言語生活	291
第三節 従来型の節用集の対応	294
第四節 早引節用集自体の諸問題	300
おわりに	305
第八章 検索法多様化の余燼	308
第三節 資料新出の可能性	344
第四節 版種研究	346
第五節 編集をめぐる諸相の解明	349
第六節 諸本の性格論・本質論	351
第七節 付録研究の進展	354
第八節 利用様態研究の可能性	357
おわりに	359
第二章 試論的に	361
——古本節用集における対利用者意識	361
はじめに	361
第一節 対利用者意識	362
第二節 印度本と付録	363
第三節 多様な変容	366
第四節 書体の意味	368

はじめに	308
第一節 仮名数検索の導入をめぐって	308
第二節 仮名順検索と編集様態	312
第三節 意義分類の再検討	315
第四節 視線移動の省力化	318
おわりに	320
第九章 イロハ二重検索節用集の受容	323
はじめに	323
第一節 イロハ二重検索節用集諸本	323
第二節 天保の改革と節用集界	331
おわりに	334
第四部 展望——新たな課題へ	337
導言	339
第一章 節用集の辞書史的研究の現況と課題	340
はじめに	340
第一節 従来の研究の概要	341
第二節 節用集諸本の現況と問題点	341
第五節 改編の契機としての出版	369
おわりに	371
第三章 付録研究への展望と限界	373
はじめに	373
第一節 付録研究への躊躇	373
第二節 付録とその効用	376
第三節 「雑多な」「百科事典的」「踏襲性」	381
第四節 地誌としての武鑑	386
おわりに	390
参考文献	391
付録 近世節用集一覧	403
あとがき	421